

2019年9月26日

## 日産自動車とフォーアールエナジー、 「日産リーフ」と中古バッテリーを使用した「定置型蓄電池」を組み合わせた 新たなソリューションを確立

日産自動車（本社：神奈川県横浜市西区、代表執行役：山内 康裕、以下、日産）、フォーアールエナジー（本社：神奈川県横浜市西区、社長：牧野 英治、以下、4R）は、26日、電気自動車「日産リーフ」と日産リーフの中古バッテリーを使用した「定置型蓄電池」を組み合わせた新たなソリューションを開始する、と発表しました。

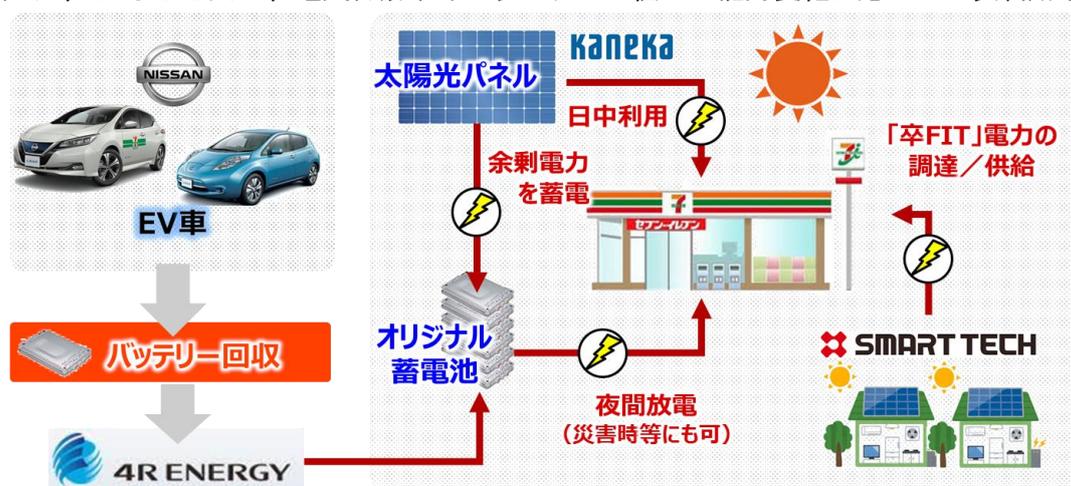
まず、26日より神奈川県内のセブン-イレブンの10店舗で開始する「再生エネルギーによる電力調達の実証実験」にて、本スキームを実証いたします。

### <セブン-イレブンでの実証実験>

- ・ 「日産リーフ」の中古バッテリーを活用した、4Rによる定置型の蓄電池を店舗に設置
- ・ 発電効率を大幅に高めた太陽光パネルも設置することで、自家発電による電力を効率的に活用
- ・ 更に、2019年11月より、発電分以外の電力の調達を「卒FIT」電力から調達することで、自家発電分と合わせた再生可能エネルギー比率100%を達成

本スキームにおいてセブン-イレブンは、電気自動車「日産リーフ」とリーフの中古バッテリーを活用した定置型蓄電池をパッケージで導入します。営業車として導入する「日産リーフ」は、クルマとしての利用が終了した後に定置型の蓄電池へと生まれ変わります。パッケージでの導入により、バッテリーの再利用までを考慮した循環型のシステムとなります。

日産は、4Rなどと共に、電気自動車やバッテリーの個々の能力変化に応じた二次利用手法



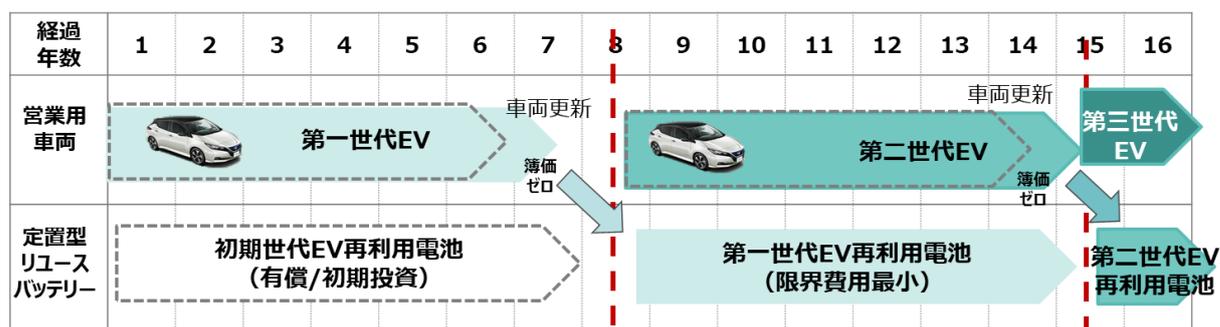
を事業モデル化し、電気自動車のライフサイクルを通じて、余すことなく活用すること（カスケードリユース\*1）を目指しています。今回のバッテリー再利用の循環型システムは、カスケードリユースのソリューションのひとつと位置付けます。

新車としての役目を終えた電気自動車は、中古車としての再利用に加え、中古のバッテリーは、ゴルフカートやフォークリフト等に再利用されています。さらに、今回の実証実験にあるような定置型蓄電池についても、市場が広がりつつあります。電気自動車は、その車体やバッテリーの能力を検証し、その能力に応じ二次利用を行うことにより、様々な形で長期間にわたりその機能を発揮できます。

「日産リーフ」は、2010年12月に初代モデルを発売して以来、現在までの国内累計販売は12万台以上を突破しており、中古バッテリーの市場についても、今後さらに広がっていきます。

今回の実証実験で使用する4Rの定置型蓄電池は、今年6月に世界初のUL\*<sup>2</sup>の認証規格であるUL1974を取得した中古蓄電池を採用しています。

持続可能なエネルギー供給モデル有効活用に必要な蓄電池は、現在、非常に高額であることが問題視されておりますが、今回、中古バッテリー使用により価格を抑えることに加え、「日産リーフ」とのパッケージ化により、長期に亘るライフサイクルでのコスト低減を実現しました。さらに、40Kwhという大容量の電気を蓄積できる蓄電池システムのため、災害時における電力源としても十分な供給を行うことが可能です。



日産は、2018年5月より日本電動化アクション「ブルー・スイッチ」の活動を開始しています。これは、日本の各地域が抱える防災、温暖化対策、過疎、観光、そしてエネルギーマネジメントなどの様々な課題を、電気自動車の大容量バッテリーやCO<sub>2</sub>ゼロの価値を活用して、自治体や企業と一緒に解決していく取り組みです。今回、4Rと共に確立したソリューションは、まさにブルー・スイッチの大きな柱となります。

日産と4Rは、「日産リーフ」と「中古の定置型蓄電池」を組み合わせた新たなソリューションを、再生エネルギーの有用性ととともに、電気自動車を利用したエネルギーマネジメントの先進的なモデルケースとして、今後、広く普及させていく予定です。

\*1 カスケードリユース：新品同様の品質からは変化しているが、その製品の資源やエネルギーに一次利用後の品質に応じて最適な形で再循環する

\*2 UL : Underwriter Laboratory、米国の安全性基準の認証機関

以 上